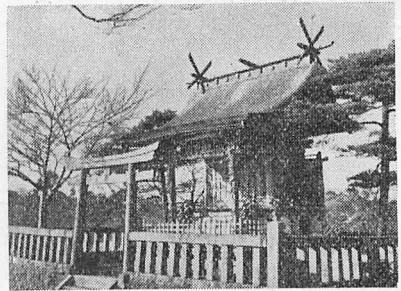


## 宮城縣に於ける海苔養殖の沿革について

小野寺 弘

本縣に於ける海苔養殖は丁度今から百年前の安政元年氣仙沼の海産物商猪狩新兵衛氏が江戸の大森で海苔の養殖と製造の方法を習得し、氣仙沼灣に於てナラを附着材とする籠を建込んで行つたのが最初である。當時同じ氣仙沼の人横田金兵衛氏と共同で養殖の經營に當つたのであるが、最初の3箇年は全く利益をあげるこ

とが出来なかつたので、江戸大森より熟練者8名を招き現地で實際の指導を受けるなど種々努力の甲斐あつて、4年目より幾分の利益が見られるに至つた。



猪狩神社

その後猪狩氏の指導により逐次灣内に於ける海苔養殖業者も數を増し、製品も増加したので、横田氏は仙臺海苔の名稱で其の販路を求めたが賣行はあまり好調でなかつた。

ここに興味あることは後に名前を淺草海苔と改めて販賣したところ意外に賣行よく、明治2年からは東京の海苔商人が直接現地で仕入れるようになり、秋田・山形・北海道方面からも續々注文あり、明治4年頃より養殖販賣とも漸く地について來た。本縣海苔養殖の先覺者猪狩新兵衛氏は又氣仙沼塩田の開墾にも力を注いだが、明治10年60歳で歿した。氣仙沼灣の養殖業者は猪狩氏の徳を頌して氣仙沼市内神明崎に猪狩神社を



建て氏を祀っているが、本邦唯一の海苔の神様であろう。雄勝灣の海苔養殖は明治5年同地の山下慶藏氏に始まり、松島灣・萬石浦・女川灣に於ては明治32年より42年に至る間縣水産試験場の試験指導によりその養殖が初められ、其の後業者と試験研究機關の努力と精進により海苔漁場も擴大され本縣は海苔生産縣として年間約6,000萬枚、26,000萬圓を産し、全國屈指の位置にある。

(宮城縣水産試験場氣仙沼分場)

## オホバモクでウナギを捕る

黒木 宗 尙

札幌から鹽釜に移り、松島灣をあちこち舟で歩き廻るようになってから3年になる。灣内を舟であちこちしていると、大きな柄をもつて大きく体を動かさせウナギカキをやっている人、又竹筒を沈めてウナギ捕りをやっている人に屢々出遭う。ところが最近になつてこのウナギ捕りに海藻を使つているのを遅蒔乍ら知つた。或いは他所でもこのようなことは行つているかも知れないが、私としては初めてで、ウナギ捕りに海藻を使つているとすつかり嬉しくなり紹介する次第である。

ウナギ捕りに海藻の何を使つているかというところ、ホンダワラ科のオホバモク (*Sargassum Ringgoldianum* HARV.) である。土地の人はンシモと云つている。松島灣では灣口、灣外に生えているが、このオホバモクを採つてきて、目方にして1~1.5貫位を束ねてその1個所を縄で縛り、海に下げる。之にウナギが入るのである。

